令和３年度

研究集録

第４７号

秋田県立大曲工業高等学校

目　　次

○巻頭言
校長　本間　秀史　・・・・・・・・・1

○「地域に開かれ、地域とともにある学校づくり」
～コミュニティ・スクール導入による、魅力ある学校を目指して～
校長　本間　秀史　・・・・・・・・・2

○令和３年度「ICT 活用推進モデル事業」中間発表　報告
ICT 推進活用委員会　鎌田　正樹　・・・・・・・・１１

○A 研修講座
１　令和３年度秋田県公立高等学校新任学年主任研修講座を終えて
１年部主任　鎌田　正樹　・・・・・・・・１６
２　令和３年度高等学校実践的指導力習得研修を終えて
機械科　岩田　佳紀　・・・・・・・・１７
３　令和３年度教職５年目研修講座を終えて
理科　工藤　　稔　・・・・・・・・２０
４　令和３年度教職５年目研修講座を終えて
土木・建築　藤田　悠太　・・・・・・・・２３
５　実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を終えて
国語科　柴田　淳司　・・・・・・・・２６

○Ｂ研修講座
１　令和３年度学校組織マネジメント研修講座に参加して
教諭　柴田　明美　・・・・・・・・２８

○校外研修
１　大曲仙北学校保健会高校部会研究会　発表資料
養護教諭　上田　一子　・・・・・・・・３２

２　令和３年度新任特別支援教育コーディネーター研修会に参加して
教諭　佐藤美奈子　・・・・・・・・３６

○授業互換週間　報告　　研修部　　・・・・・・・・３８

○編集後記

巻　頭　言

校　長　　本　間　　秀　史

令和３年度の「研究集録第４７号」を発刊することができました。日頃から授業改善、分掌業務、部活動等で忙しい中、寄稿された先生方、編集等に携わった研修部の先生方に感謝申し上げます。また、研究内容について、多くの方々からの忌憚のない御意見や御指導・御鞭撻をいただければ幸いです。

令和３年度は、昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の脅威が更に身近に迫る状況の中、感染拡大防止の対応から計画されていた様々な機会が昨年度と同様に中止や規模縮小となってしまったことは大変残念に感じます。しかしながら、ＩＣＴの整備が進みオンライン開催等様々な工夫がなされ、例年通りとは行かないまでも研修の機会が設けられたことは幸いと思います。令和４年度から「新学習指導要領」が年次進行で実施されることに伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）から授業改善の試みを実施して参りました。コロナ禍の中、「学校の新しい生活様式」における授業は、「３密」を防ぐことが重要視され、グループワークや活発な討論等は難しい状況になりました。このような状況において、「主体的に学習に取り組む指導方法の工夫」「ＩＣＴの効果的な活用によるわかる授業の工夫」を課題として、各教科において研究を進め、効果的な主発問や目標達成に向けた教材の工夫（ＩＣＴの活用）等、生徒が分かりやすい授業の実践につなげている所です。生徒一人１台タブレットと電子黒板の整備により、ＩＣＴを日常的に活用できる環境の整備を進め、各教科での研究成果を全体で共有し不断の授業改善に努めていきたいと考えます。

現在、学校が抱える教育課題は多様化・複雑化し、教育目標の達成には教職員の研修と意識改革が不可欠と思われます。教職員が互いに学び合い、情報を共有し、一人一人の力量を高めていくことが求められます。「授業を企画し構想する力」、「生徒の状況に応じて適切に指導する力」、「授業を振り返り客観的に評価する力」の授業力を高めるため、日々の研究・研修する意欲的な教職員集団でありたいと思います。次年度は、ＩＣＴの活用が更に充実し、新たな研究テーマとして多くの成果を発表できることを願っています。

「地域に開かれ、地域とともにある学校づくり」

～コミュニティ・スクール導入による、魅力ある学校を目指して～

（秋田県立大曲工業高等学校）

1　はじめに

本校は、昭和３７年に地域産業の発展に寄与する技術者育成の期待を担って、機械科、電気科、土木科、建築科の４学科で開校しました。現在は、機械科、電気科、土木・建築科の３学科からなり、各学年４クラスの計１２クラス、生徒定員４２０名となっています。電気科では電気コースと電子コース、土木・建築科では土木コースと建築コースを設け、それぞれ２年次から希望によりコース選択が可能となっています。

「自ら学ぶ意欲と創造力に富み、心豊かな人間を育成する」を教育目標に掲げ、将来、工業技術者として産業や地域社会の発展に貢献する生徒の育成を目指し、県南工業系学校の拠点校として、活力に満ちた魅力ある学校、コミュニティ・スクールを推進する地域とともに歩む学校を目指し、様々な教育活動に取り組んでいます。

今回、「地域に開かれ、地域とともにある学校づくり」として、コミュニティ・スクール導入の取組について紹介させていただきます。

2　コミュニティ・スクールの取組

（１）導入の経緯

平成２７年の中央教育審議会に取りまとめられた答申において、「全ての公立学校において、地域住民や保護者等が学校運営に参画する仕組みとして、コミュニティ・スクールを目指すべきである」とされたことを受け、平成２９年に「コミュニティ・スクール導入等促進事業」の指定を２年間認められました。この間に「コミュニティ・スクール推進委員会」を設置して導入に向けた準備を進め、平成３１年度（令和元年度）からコミュニティ・スクールを本格的に導入し、本年度（令和３年度）で３年目を迎えています。

本校として、コミュニティ・スクールを導入することは、地域住民や保護者等との協働による、より良い教育の実現を目指して、地域に開かれ、地域とともにある学校づくりに取り組もうとするものです。工業高校という特色を活かしつつ、人口減少に歯止めがかからない状況の中で、地元企業等との連携をさらに深め、卒業生の地元就職の促進を図り、地域の存続にかけても地域住民と協働で魅力ある学校づくりを進めるため学校運営協議会を組織していくことは有効であると考えました。また、これまで実施してきた地域連携等の取組を基本として、新たな事業を増やすことよりも、各事業の更なる充実を図ることを確認しています。

（２）目的

生徒により良い教育を提供するため、次の各項目の推進充実を図り、学校運営に保護者や地域の声を積極的に反映させ、地域に開かれた特色ある学校づくりを進めることを目的としてテーマを定めました。

① 地域の力を学校運営に導入することを通じて学校運営の活性化を図る。

② 保護者や地域住民等の参画により、地域との連携と協働体制の充実を図る。

③ 生徒が地域から学び、地域づくりに参画・貢献することのできる事業を積極的に展開する。

④ 企業や大学等との連携事業を通じて、生徒の望ましい職業観を養い、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる。

⑤ 校種間連携事業などを通じて、生徒の学びや体験活動の充実を図るとともに、小中学生のものづくりへの興味・関心を喚起し、専門高校への理解を深めさせる。

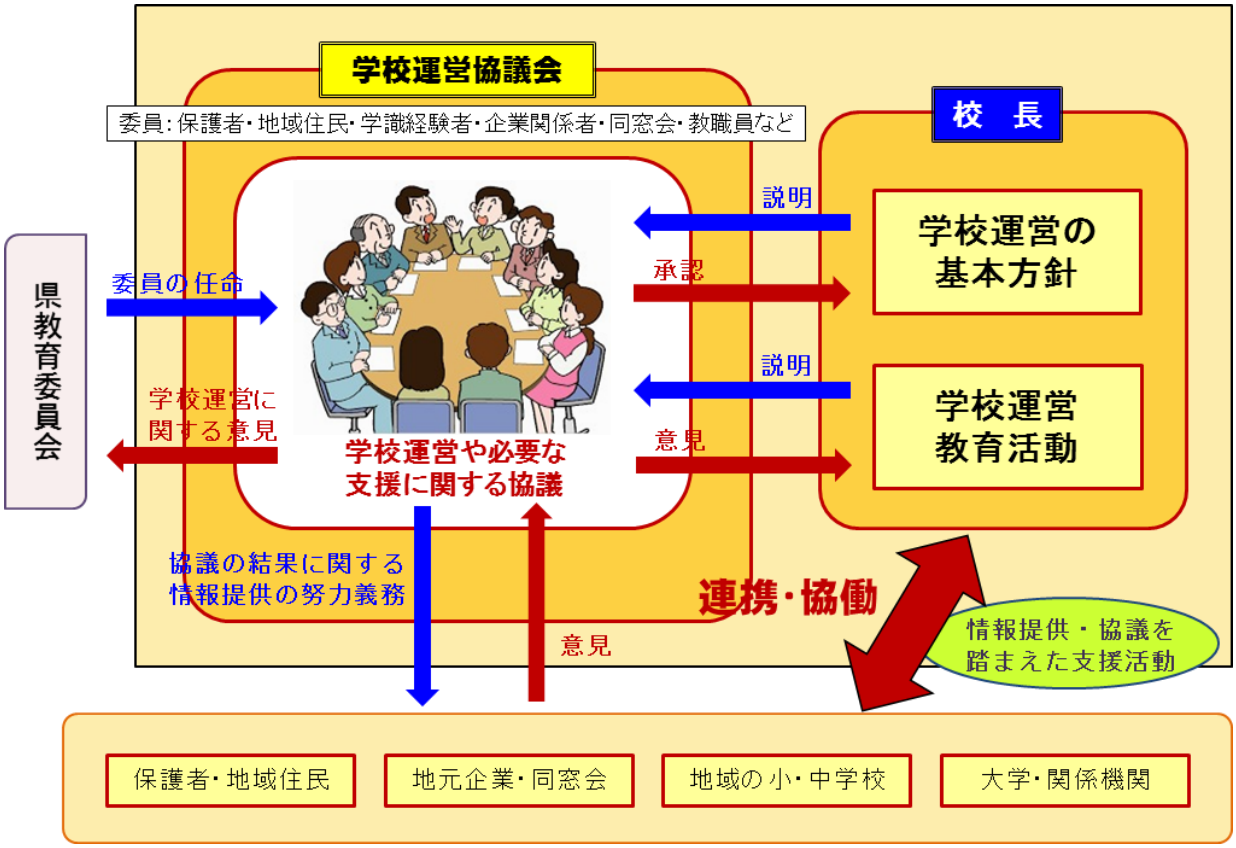
≪テーマ≫

地域の教育力を活用し、次代を担う人材を育成する

～ 共育・共創による地域連携のさらなる充実・発展 ～

（3）組織・体制

＜コミュニティ・スクールのイメージ＞



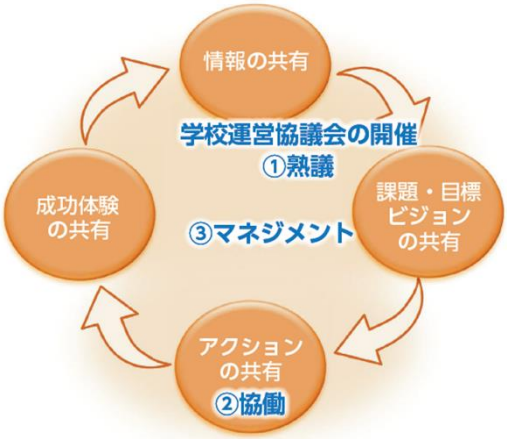
＜学校運営協議会の役割＞

学校運営に関する全体的な協議の場

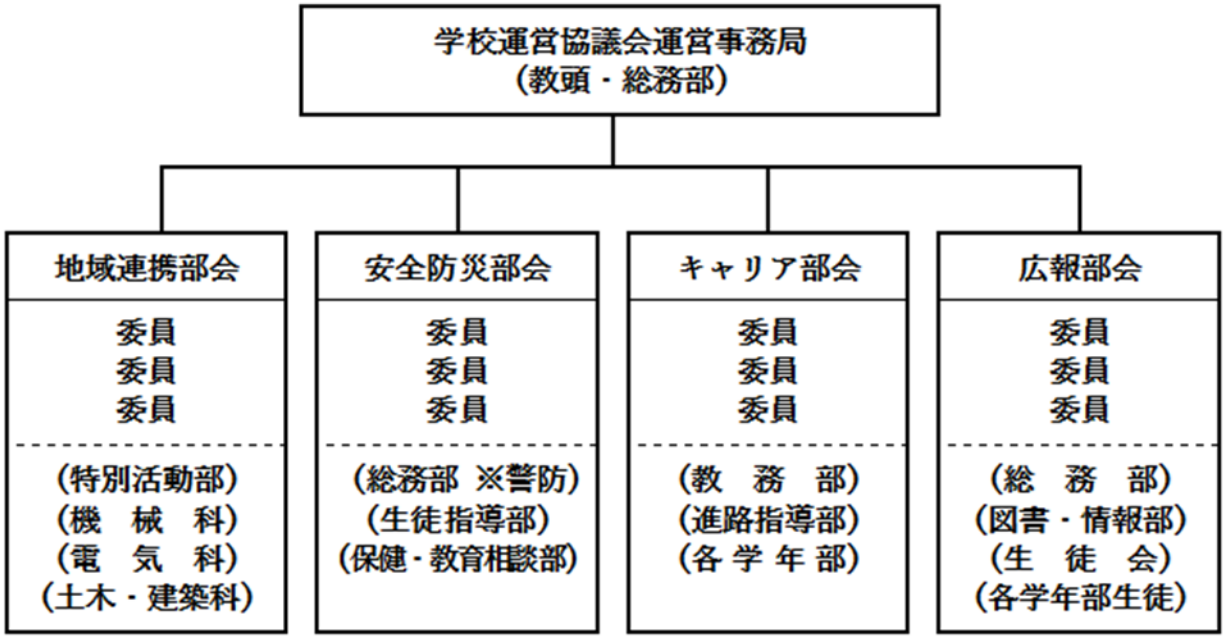
役割１　校長が作成する学校運営の基本方針を承認する

役割２　学校運営について、校長（又は教育委員会）に意見を述べることができる

役割３　学校支援活動等の総合的な企画、学校関係者評価の実施等



＜校内組織体制＞



（４）学校運営協議会の取組（令和２年度）

学校運営協議会を年３回開催しました。

第１回協議会（６月）・・・学校経営方針の承認、今年度の取組、部会別協議

第２回協議会（９月）・・・授業参観、各部会からの報告、部会別協議

第３回協議会（２月）・・・部会別協議（学校評価、保護者アンケート、成果と課題・次年度の取組）

（学校経営方針、今年度の取組）

（部会別協議）

① 地域連携部会の取組

【地域行事、ものづくりによる地域貢献と環境美化、企業および小中学校との連携事業の推進】

・地域連携事業を増やすよりも、現在実施している内容の充実を図ることを確認。

・年間の行事が非常に多いことから、行事と行事の繋がりを意識して、行事の統合を検討していく。

＜令和２年度　地域連携関係事業計画＞

Ⅰ　学校と地域との連携

Ⅱ　学年と地域との連携

Ⅲ　各学科と地域との連携

	名称	開催日	開催場所	主催側	対象者	内容
Ⅰ	大仙市チャレンジデー	中止	大仙市内	大仙市	大仙市内にいる人	15分間以上継続して何らかの運動をする
	親子ものづくり教室	8月1日（土）	本校	各学科	大仙市内小学生40名	ソーラーカー、橋、鉢等の製作
	花火ウィークパレード	中止	花火通り	吹奏楽部	一般市民	中止（物量の妨げとなるため） 演奏パレード
	体験入学	7月30日（木）	本校	教務部	主に、県南地域の中学3年生	体験実習、プレゼン、校舎見学
	仙北中との連携事業	11月12日（木）	本校と仙北中学校	本校で開催（各学科担当）	仙北中2年生	体験授業
		12月10日（木）		仙北中で開催（機械科担当）		
	大工祭	9月18日（金）	本校	特活部	一般市民・保護者	各科展示、クラス発表、模擬店
	秋の稔りフェア	中止	大仙市市民活動交流拠点センター	大仙市・各学科	大仙市民	各科製作物の展示
	産業教育連絡協議会	中止	本校	大曲工業高校	地域企業約40社	意見をもらう
	地元小学校との連携事業	11月20日（金）	本校	各学科	東大曲小学校6年生	技術・家庭の授業
	県工業系生徒による課題研究発表会	2月2日（火）	本校	秋田県工業クラブ	県内各工業系高校	地元企業に見学案内を送付予定
Ⅱ	地域清掃（第1学年）	中止	若葉町 諏訪町 田町	保健・教育相談部・1年部	第1学年	1時間程度の作業
	地域清掃（第2学年）	6月22日（月）		保健・教育相談部・2年部	第2学年	
	地域清掃（第3学年）	中止		保健・教育相談部・3年部	第3学年	
	インターンシップ	中止	大仙市、美郷町、仙北市、横手市	インターンシップ推進委員会	第2学年	インターンシップ3日、事前事後指導2日
Ⅲ	大曲仙北電気工事協同組合交流会	9月9日（水）	本校	大曲仙北電気工事協同組合	電気科1年	高所作業車、照明回路配線、取付体験、交流会
	情報関連産業育成事業	5月26日（火）～	本校	県教育委員会・（株）テクノス秋田	電気科	工業技術基礎、実習
	測量出前講座	8月27日（木） 9月1日（火）	本校	（株）大測、土木・建築科	土木コース2年	測量、GPS
	少人数教育事業	9月3日（木）～ 10月22日（木）	本校	県教育委員会（秋田大学名誉教授）	土木コース3年	土木構造物と災害等について
	測量設計出前講座	9月23日（水）	本校	建土整備コンサルタンツ協会	土木・建築科1年	測量技術と仕事内容の説明
	現場見学	10月13日（火）	成瀬ダム 十文字中学校	県建設部建設業協会	土木・建築科1、2年	現場見学
	大工花火	10月29日（木）	本校	㈱北日本花火興業、電気科	地域住民	課題研究
	地元企業見学会	11月11日（水）	大仙市、湯沢市	機械科	機械科1年	秋田エプソン㈱、㈱斉藤光学
	出前説明会	12月16日（水）	本校	土木・建築科	土木・建築科1、2年	企業6社
	3次元CAD体験セミナー	中止	本校	機械科	地域社会人	社会人5名が受講

≪親子ものづくり教室≫

1　日　　時　　8月1日（土）９：３０～１２：００

2　場　　所　　本校実習室および教室

3　参 加 者　　参加を希望する旧大曲市近隣の小学校４～６年生と保護者

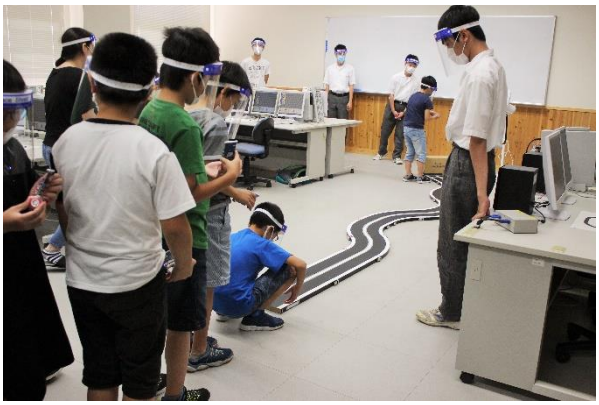
4　開催教室　　Ａコース：ソーラーカー製作（８組）

Ｂコース：マイコンカー製作（１０組）

Ｃコース：橋の模型製作（４組）

Ｄコース：リモコンケース製作（１０組）

（ソーラーカーの製作）



（マイコンカーの製作）

（橋の模型製作）

（リモコンケースの製作）

≪仙北中学校との連携事業≫

1　日　　時　　１１月１２日（木）１３：００～１５：００

2　場　　所　　各科実習室、会議室、図書室

3　参 加 者　　仙北中学校２年生（２２名）

4　内　　容　　1）全体会

2）実習棟見学

3）授業体験

・ブラシカーの製作　　・プログラミング体験

・測量体験　　・折り紙建築

4）先輩と語る会

（ブラシカーの製作）

（プログラミング体験）

（測量体験）

（先輩と語る会）

≪電気工事組合との交流会≫

1　日　　時　　９月９日（水）

2　場　　所　　体育館、電気科実習室、駐車場

3　参 加 者　　電気科１年生２クラス、大曲仙北電気工事協同組合青年部１７名

4　日　　程　　１）開会行事

２）高所作業車体験、照明回路配線体験、圧着端子、工具の体験

３）閉会行事

（圧着端子・工具の体験）

（高所作業車体）

≪県内建設企業による高校生向け出前説明会≫

1　日　　時　　１２月１６日（水）１２：２５～１５：１５

2　場　　所　　土木・建築科製図室、会議室

3　参 加 者　　土木・建築科１・２年生、仙北地域振興局、秋田県建設業協会（８社）

4　内　　容　　１）開会行事

２）企業説明・卒業生の話

・４ブース×２教室

・１ブース２０分程度

・生徒が８班に分かれて先輩の話と企業説明を聴講

３）閉会行事

② 安全防災部会

【防災教育・避難所開設準備・大仙市との連携の推進】

・避難所開設説明会は１年生に対して実施し、防災意識を高めていく。

・避難所開設に関連したことについて、各学科の課題研究のテーマとして扱うことを推進する。

≪災害時の避難所開設説明会≫

1　日　　時　　７月１３日（月）１４：５５～１５：４０

2　場　　所　　第一体育館

3　参 加 者　　１年生、大仙市総務部総合防災課

4　内　　容　　1）防災管理監による講話

2）体験コーナー見学・説明

③ キャリア部会

【企業や大学、同窓会等との連携によるキャリア教育・工業教育の推進】

・進路情報を有効に活用し、生徒の進路実現に向けた指導の在り方を考えていく。

・進路情報の発信の仕方について検討していく。

《ものづくりオープンカレッジ in 秋田》

1　日　　時　　令和元年　１０月１８日　１１：００～１４：００（令和２年度は中止）

2　場　　所　　秋田県立大学

3　参 加 者　　２年生

4　日　　程　　1）開会行事

2）６～７名の小グループに分かれ企業ブースを見学

3）閉会行事

④　広報部会

【学校と保護者や地域間のコミュニティ・スクールとしての取組等の情報送受信の推進】

・各実践内容を集約し、定期的にＨＰを活用して発信していく。

・ＨＰ以外での情報発信を検討していく。

≪本校のＨＰ≫

（ＨＰの活用）

≪ＨＰ以外の情報発信≫

（学校祭の案内を地域で配付）

３　おわりに

現在、コミュニティ・スクールを導入して３年目となります。工業高校の特色を打ち出せるコミュニティ・スクールを目指し、地元企業との連携を重視し、専門教育の深化や質の向上を目指した教育活動を念頭に置いて取り組んできました。本校の取組は市町村、高等教育機関、産業界との協働による共同事業体の機能をもち、委員の中に地元企業の方々が入ることで地域コーディネート機能も兼ねています。人口減少・少子高齢化が急速に進む地域にあって、地元産業を担う人材育成を託された本校の果たす役割は一層高まっていると考えられ、コミュニティ・スクール導入は、地域や地元産業との連携をより強め、地域とともに歩んでいく教育活動に繋がるものと考えています。これまでの取組を様々な視点から見直しをはかり、より充実した学校運営協議会を運営し、一定期間（3 年目）において抜本的な見直しも考えていました。新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、十分な取組が制限される状況が続き、検証も難しい現状にあります。しかしながら、コミュニティ・スクール導入前の学校運営についての評価は、学校評議員の方々から年度末に意見をいただく仕組みとなっていました。人事異動や分掌業務の変更等の要因も加わり、学校運営の改善はスピード感に課題があったと思われます。学校運営協議会を年間３回開催することにより、年度内に計画（P）・実践（D）・検証（C）がなされ、次年度への提言（A）を受けることで、次年度の改善（案）がスムーズに進んでいることを実感し、成果の一つとして上げられると思います。今後は、年間で４回の開催も検討していきたいと考えています。最後に、本校の進路状況の推移を次のとおり示します。令和２年度は進学率が高くなり、また県内就職率が急激に高くなりました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響も要因として考えられますが、コミュニティ・スクール導入の取組により地元企業に魅力を感じる生徒が増えたことも要因の一つではないかと思われます。今後も、コミュニティ・スクール導入を継続し、地域に開かれ、地域とともにある学校づくりを進め、その成果を高める取組を実践していきたいと思います。

【進路状況の推移】

平成２８年度			平成２９年度（ＣＳ準備）			平成３０年度（ＣＳ準備）			令和元年度（ＣＳ導入）			令和２年度（ＣＳ導入）		
進学	23%		進学	27%		進学	28%		進学	25%		進学	38%	
就職	77%		就職	73%		就職	78%		就職	75%		就職	62%	
	県内就職	47.6%		県内就職	49.2%		県内就職	40.4%		県内就職	43.6%		県内就職	57.3%
	県外就職	52.4%		県外就職	50.9%		県外就職	59.6%		県外就職	56.4%		県外就職	42.7%

令和３年度「ICT 活用推進モデル事業」

中間発表会　報告

ICT 推進活用委員会　　鎌田　正樹

《 研究テーマ 》
問題を発見し、豊かな関わりの中で主体的・対話的に問題を解決しようとする生徒の育成
～　ＩＣＴを活用した探究力の向上を目指して　～

期　日　　令和３年１１月１２日（金）
会　場　　秋田県立横手清陵学院高等学校

１．研究経過の説明

・ 探究力の向上を目指した授業改善と取り組み（ＩＣＴ活用）
定期的に各教科で授業の問題点を挙げ、改善策を考える。
・ ＩＣＴを活用してどのように問題を解決していくか（指導案参照）
中高６年間のルーブリックの目標を必ず指導案に入れる。

２．ICT 環境整備と活用について

（授業での活用）

・ 電子黒板（ｎｅｗｌｉｎｅ）を HR 教室に設置。

・ Chromebook は３年間同じものを使用（個人もち）。
保険に加入している（学校内保険　１台 300 円）、校外に持ち出したい生徒は別に保険をかけている。
持ち出す場合の充電アダプターは個人で購入させている。

・ タブレット充電庫は各教室に１台設置。

・ Classroom を全学年、全クラス、全教科、部活動で設置。
生徒への連絡、課題、小テストを行っている。SU（スキルアップ）は過去問等を配付し Chromebook で行っている。

・ Wi-Fi ルータ（学校で３台購入）を使用して対応していない教室で使用している。
大型提示装置はプロジェクターを使用。（例：家庭科室、理科室、製図室等）

・ Google Meet を使用して遠隔授業を実施。欠席者や別室登校者に対応。
授業時に生徒が Chromebook を黒板側に向けて授業の内容を通信している。

（行事での活用）

・ 学校の集会、講演、学校祭は Zoom で中継して実施。
Zoom は年間、2,000 円で契約している。
文化祭の予算で Zoom スイッチャーを購入し、カメラのアングルを切り替えて視覚効果を向上させている。
4 系統の HDMI を切り替え可能。

・ 毎朝の検温状況を Google フォームで入力し、Ｅｘｃｅｌ VBA で作成し、自動集計して担任に送信される。

・ 保健室の入室状況もフォームで入力し、職員が確認できる。保健日誌も自動的で入力される。

・ Google カレンダーを使用し職員、生徒、保護者の日程確認に利用している。PDF もつけられる。

・ 部屋予約システムとして使用。

・ 今年度、生徒の履歴書きに Google ドキュメントを使用した。
求人票やパンフレット、ホームページの内容を検索し、シートに入力していくことで、履歴書が書きやすくなるシステムになっている。面接にも対応できる。
履歴書シートを提出し、担任、学年主任、科長、教頭に同時に添削してもらうことで時間が大幅に短縮された。担任の前に行列ができなくなった。

（今後の取り組み）

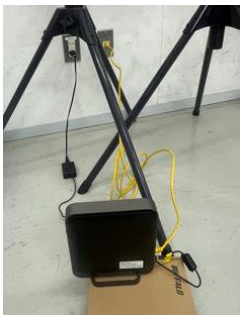
・ DISPLAY MANAGEMENT PLUS で電子黒板のリモートコントロールを実験している。
活用方法として、毎朝の予定確認、連絡事項、時間割変更等を各教室の電子黒板に表示させる。来年度に成果を発表予定。

３．研究授業

○　工業（製図）

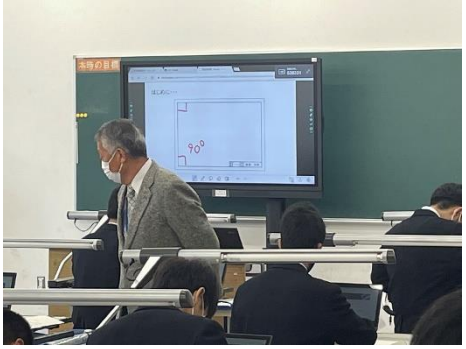
教科の研究テーマと ICT 活用
生徒が課題に対し自ら考え、理解を深めるための ICT

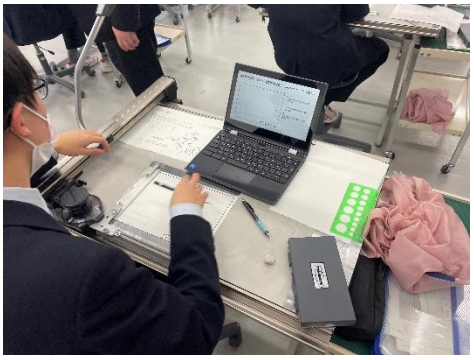
１．　ＩＣＴの利用方法



- Chromebook を使用し Google クラスルームでデータを公開。
- 電子黒板を使用。
- Google スライドで製図の図面をアニメーション動作させる。
- Google フォームを用いて自己評価を行う。
- Google Meet でリモート授業を行う。
- Wi-Fi ルータを活用。

２．　授業の感想





新型コロナウイルスやインフルエンザ、冬季の交通事情により登校できない生徒を想定したリモート授業を行っていた。製図室で行われている授業に３名の生徒がそれぞれ自宅でリモート参加している状況です。タブレットを教材表示として使用するため、電子黒板の画面を共有していた。リモートでも積極的に質問を行えるか確認していたが、ＴＴでないと対応できない気がした。

授業の教材は、理解度が高い生徒と低い生徒用に２タイプ用意され、自分の進度に合わせて進んでいけるようになっていた。電子黒板を使用しての説明も分かりやすく、効果的であった。新学習指導要領に対応するため、生徒の到達度をフォームを用いて自己評価させていた。最後に全体の評価を電子黒板に表示し、取り組み状況について全員で確認できていた。

製図室に ICT 環境が整っていないため、Wi-Fi ルータを使用して学習系のネットワークを AKITAGIGA に変換し対応していた。本校でも ICT 環境が整っていない部屋が多いため、この方法で対応可能である。検討していきたい。

○　国語科（国語総合）

教科の研究テーマと ICT 活用
語彙力・表現力を強化し自分の意見を適切に他社に伝える能力を身につけさせる
ＩCT 活用

１．　ＩＣＴの利用方法

・ChromeBook を用いて映像を視聴した。
・Padlet（オンライン上での掲示板）を用いて意見を交流させ、考えを深める。

２．　授業の感想

Padlet は匿名で意見を言えるので、生徒は活発に意見を発していた（書いていた）。書いた意見に対して、質問や反対意見を述べることもできるので、数名の生徒が反論・質問していた。そして、そのやりとりを全ての生徒が共有して見ているので、全体として考えが深まったと考えられる。

最終的には、小論文にまとめるためのメモ作りが本時の目標であったが、様々な意見が出たり、画面上で意見の集約が困難だったりとして全員が自己の考えをまとめるのは難しかったと思われる。全員が一気に交流できるのが良い面だと感じたが、収拾を付けにくいのが課題である。生徒がこのアプリを繰り返し用いれば、やっと収拾までできるのではと思った。

○　地歴公民科（世界史 B）

教科の研究テーマと ICT 活用
主体的に情報を得て分析・理解し、他社との協働的な学びを通して新しい考察を導き出す ICT の活用を目指す。

１．　ＩＣＴの利用方法

・ChromeBook、Google スライドを利用して、グループで論述のまとめ、発表。
・プロジェクターをグループ毎に使用し、壁や電子黒板に投影。（３カ所）

２．　授業の感想

３人×３グループの少人数選択授業であり、全員がChromeBookを持ち、グループ毎にまとめた論述を、プロジェクターで映し出していた。

各グループでGoogleスライドを共有し、シートをまとめ、その内容をそれぞれのグループ内で発表者と他グループでの発表を聞く・質問者とに分かれ、全体ではなくグループ毎に発表し、それぞれがまとめたことの相違点や質問などをし合って理解を深め、自分たちの論述を書き直して完成させていくという手法であった。

生徒達は、活発に活動して知識を深めており、新しい学習の形を参観し大変勉強になった。

○　数学科（数学Ⅰ）

教科の研究テーマとICT活用
生徒の考えを引き出す手段としてICTを活用し、課題解決のための探究力の育成を目指す。

１．　ＩＣＴの利用方法

・ChromeBook、Googleスライドを用いて問題を提示し、課題を把握させた。
・Jamboardを利用して、クラス全体で意見をまとめ、発表した。
・図形描画ソフト(GeoGebra)を操作させ空間図形を多面的に考察させた。

２．　授業の感想

写真やイラストを用いたスライドで問題を提示することにより、課題をより身近なものとして受け止め生徒の意欲を引き出していた。タブレットを活用する授業に対して生徒は意欲的に取り組むため、学習への意欲喚起については有効な手立てであると感じた。一方で、議論のための Jamboard や図形描画ソフトの利用に慣れていない生徒が多く、自分で考えずにウェブで解法の検索をしてしまう生徒もいた。

有効なICT活用の方法については、授業者と生徒が一緒に使用し用途の幅を広げていくことが大切であると感じた。ICT を使用することが目的とならないよう、効果的な活用場面・方法について考察を深めたい。

令和３年度秋田県公立高等学校新任学年主任研修講座を終えて

１年部主任　鎌田　正樹

１．はじめに

本校に転勤２年目で、教員生活で初めての学年主任を担当することになった。学年主任としてリーダーシップを発揮し、学年部の職員と生徒との信頼関係を築き運営できるか不安なところもあるが、高等学校新任学年主任研修講座を受講する機会を得たため、研修の概要を報告する。

２．研修の目標

学年経営に関する理論と実践の在り方についての研修を通して、実践的な指導力を高める。

３．研修の日程

（全県から３６人の新任学年主任が参加）

Ⅰ期

（１）期　日　令和３年５月１４日（金）

（２）場　所　秋田県総合教育センター

（３）日　程　１０：００～１６：１５

○望まれる学年主任像と学年主任の役割
＜講　義＞

○学年経営の実際
＜実践発表＞

○学年経営における課題への対応
＜協　議＞

Ⅱ期

（１）期　日　令和３年６月２４日（木）

（２）場　所　秋田県総合教育センター

（３）日　程　１０：００～１６：１５

○生徒指導における学年主任の役割
＜講義・演習＞

○学年経営と組織マネジメントの基礎
＜講義・演習＞

○思春期の揺れと成長を共に歩む
＜講　話＞

４．研修内容

第Ⅰ期では、学年主任の職務と役割、具体的な取り組み、課題への対応について話を伺った。学年の目標に基づいた明確な見通しを立て、共通理解を持って学年を経営することが必要であること。円滑な学年経営のためには、生徒、教職員とのコミュニケーションに務め、信頼し合い、報告・連絡・相談を密にしていくことを学んだ。

次に、自校の課題とその対応について事前のレポートを参考に、少グループに分かれ情報交換を行った。基礎的生活習慣の確立、基礎学力の向上､進路実現等が共通課題だった。共感を持てたと同時に様々な対応策があることに気づけた。大谷翔平選手の目標達成マンダラチャートを参考に学年目標を達成するためのシートを作成して他のグループと意見交換した。

第Ⅱ期では､いじめ､不登校の理解と対応、学校組織マネジメントの基礎、思春期の特徴や対応策について話を伺った。いじめは早い段階での対応が必要であり、SNS 等での誹謗中傷などグループでのトラブルが増加している。少しの変化にも対応できるようにしていきたい。組織マネジメントでは、深く学年主任の立場を考える機会となった。生徒、担任のことを考え３年間のビジョンを見据えて協働していきたい。

４．おわりに

今回の研修を通して、学年主任としてリーダーシップを発揮しながら先生方と協働し、望ましい学年部を築いていきたいと感じた。様々な悩みを抱える生徒の要望に応えるため日々試行錯誤を繰り返しているが、お互いに人生を楽しめるように共に成長していきたい。

令和３年度　高等学校実践的指導力習得研修を終えて

機械科　岩田　佳紀

1　はじめに

本県の教員として採用され、早くも２年が経過しようとしている。昨年度に続き、コロナ禍により様々な制限がある中での研修となったが、科の先生をはじめとする多くの先生方に指導・ご支援いただくことで、充実した１年間を過ごすことができた。少しでも早く１人前の教員となれるよう、研究に励んでいきたい。本稿では、研修内容の概要と１年間の研修の成果と課題について報告する。

2　研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身につける。

3　校外研修

3-1　校外研修の日程

○Ⅰ期（5月18日（火））

・保護者対応と連携

・学校組織の一員として―学校教育目標と学級経営―

・教材研究と教材開発の実際

○Ⅱ期（8月26日（木））

・模擬授業研修

※新型コロナウイルス感染拡大に伴い、所属校での課題設定型の自己研修に変更

3-2　校外研修の所感

新型コロナウイルス感染症の影響で、模擬授業研修が中止となったため、他校の先生方の授業を拝見することができず、非常に残念であったが、校内において、機械科の先生方を中心に、学習指導案の添削やアドバイスをいただくことができ、貴重な経験であった。

4　校内研修

4-1　校内研修の日程

次ページの表に記載する。

4-2　校内研修の所感

研修を通して、生徒指導や法規以外にも、機械科の専門的な内容に関して理解を深めることができた。専門的な知識や技術を生徒に正しく伝えるためにも研修以外でも理解を深められるようにしていきたい。

5　おわりに

この研修を通して、教員としての基礎的なの能力の向上につなげることができた。忙しい時間の中でも、研修の時間をとっていただき、指導してくださった先生方に改めて感謝を申し上げたい。来年度も研修が計画されているので、より一層成長できるよう、業務に励んでいきたい。

表－1　校内研修の日程

実施月日（曜日）		研修内容	領域	研修方法・形態	研修時間	主な研修指導者
8/27	（金）	教材研究		研修者と担当教員での研究会	1	担当教員　佐々木和美
9/27	（月）	学習指導案作成		研修者と担当教員での研究会	1	担当教員　佐々木和美
10/15	（金）	学習指導案事前検討会		機械科全職員による検討会	1	担当教員　佐々木和美
10/19	（火）	研究授業		校内での研究授業	1	担当教員　佐々木和美
10/19	（火）	授業研究会		機械科全職員での授業研究会	1	担当教員　佐々木和美
7/6	（火）	教員と法律	①	講義形式での研修	1	教頭　向川　俊弘
7/6	（火）	危機管理について	②	講義形式での研修	1	教頭　向川　俊弘
7/16	（金）	生徒指導と学級経営	③	講義形式での研修	1	生徒指導主事　羽角陽一
7/12	（月）	機械加工の指導方法	④	実技作業をとおしての研修	3	担当教員　佐々木和美
9/15	（水）	３次元 CAD の指導方法	④	実技作業をとおしての研修	2	実習助手　遠藤宏明
12/14	（火）	溶接作業の指導方法	④	実技作業をとおしての研修	2	教諭　大塚久司

※ ①基礎的素養　②マネジメント能力　③生徒指導力　④教科指導力

第１学年Ｍ組　機械科学習指導案

学校名　大曲工業高等学校
指 導 者　　岩 田 佳 紀
授業月日　８月２６日（木）

１　単元名

第２章「機械材料」　　第３節「鉄鋼材料」　　鋼の熱処理

２　本時の計画

（１）ねらい　　簡単な方法で鉄鋼材料の熱処理を行うことで、機械的性質の変化を体感し、金属に望ましい性質を持たせる方法を理解することができる。

（２）展　開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	・鋼線を折る方法について考える。（個人、グループ活動） ・ライターを使って、鋼線を折る方法について考える。	・実際に鋼線を使って、折ることができるか試す。 ・出た意見を全体に共有しながら、内容を整理する。 ・熱によって材料の性質を変化させる事に注目させる。	A〔関心・意欲・態度〕鋼の熱処理の目的と方法に関心を持ち、意欲的に取り組もうとする。
展開 35分	・熱処理によって得られた鋼線がどのような変化をしたか予想する。 ・熱処理によって材料の機械的性質が変わることを理解する。 ・焼入れ、焼戻し、焼なまし、焼ならしについて学習する。	・熱処理を前で実演する。 ・予想する際、なぜそのように考えたのか全体に共有させる。 ・熱処理の方法と効果に着目させる。	
まとめ 5分	・本時の学習の振り返りをする。 ・次回の授業内容の確認をする。		

※評価の観点　Ａ：関心・意欲・態度　Ｂ：思考・判断・表現　Ｃ：技能　D:知識・理解

令和３年度「A-12 教職５年目研修講座」を終えて

理科　　工藤　稔

1. はじめに

1-1. 研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図ること。

1-2. 研修の内容

（1）講座Ⅰ（実施日：６月１１日（金））
　(ⅰ)教育相談と人間関係作り
　(ⅱ)学校組織の一員として
　　―マネジメントの視点―
　(ⅲ)生徒の実態を踏まえた授業改善①
（2）講座Ⅱ（実施日：９月３日（金））
　(ⅰ)発達障害のある生徒の理解と支援
　(ⅱ)生徒の実態を踏まえた授業改善②

秋田県教員育成指標[注１)]によると、４年目～１０年目は実践的指導力向上期（第２ステージ）「実践と改善」の段階と位置付けられ、各キャリアステージで求められる資質能力は「本県の教育課題への対応」、「マネジメント能力」、「生徒指導力」、「教科等指導力」があり、本研修ではそれぞれの分野について総合的に研修を行った。

本稿では、それぞれの研修内容の概要と、研修の成果と課題について報告する。

2. 講座Ⅰについて（概要と成果・課題）

講座Ⅰの研修は、それぞれ「生徒指導力」「マネジメント能力」、「教科等指導力」に対応する研修であった。

(ⅰ)では、生徒からの教育相談に対してどのように対応していくのか学んだ。初任者研修、３年経過研修でも強調されている「傾聴する姿勢」や「円環的思考」の重要性を再確認する場となった。加えて、カウンセリング技法についても「スケーリングクエスチョン」や「山登りのワーク」を例に実践的な指導法を学んだ。自分の今までの生徒との接し方を思い出しながら、これからするべき声かけについて気づくことができる場であった。

(ⅱ)では、自校の学校要覧を利用した「学校プレゼンテーションシート」の作成の活動を行った。この活動を通し、学校全体へ視野を広げた理解に取り組んだ

(ⅲ)では、英語、農業、理科で協議を行った。事前に作成した資料やレポートを元に自身の課題を設定し、９月３日の「(ⅱ)生徒の実態を踏まえた授業改善②」までに実践する内容を設定した。

3. 講座Ⅱについて（概要と成果・課題）

コロナウイルスの接触者と認定されたため、センターでの研修には参加できず、配付資料をもとに自己研修を行った。その後、自己研修のレポートを作成した。提出後、指導主事から研修についての評価と今後についてのアドバイスをいただいた。

4. おわりに

昨年から、コロナウイルス感染症拡大に伴い研修の機会が減り、高教研なども中止となっていた中での研修であった。他校でのオンラインの取り組みや ICT 活用について知ることができ、非常に刺激を受けた。教職歴が長くなるについて、自分の指導法が確立されるとともに、新しい取り組みも減っていると感じた。今回の研修で時代の変化とともに教員も常に変化し続ける大切さを実感することができた。今後も「今」目の前にいる「生徒」を大切に指導していきたい。

［注］

注１）別紙（秋田県公式サイトより）

（様式）

令和３年度　Ａ－１２　教職５年目研修講座（高等学校）Ⅱ　研修報告書

学校名	秋田県立大曲工業高等学校	氏　名	工藤　稔

Ⅰ期に設定したテーマに沿い、課題の解決に向けての授業改善を実践していただきました。そのことを振り返り、自己評価してください。その上で、成果が見られた点と、新たに浮かび上がった課題、今後の改善策について、まとめてください。

１　一期の設定テーマ

「LTD 学習法の実践報告」

２　自己評価

大学の初等教育での実践が多いLTD学習法*[1]を高等学校の物理基礎の授業で実践したことは自分自身の授業への考え方を変えるきっかけとなった。また、コロナウイルス感染拡大に伴う授業や研修のオンライン化は、今後の教育現場でのICT活用の流れを加速度的に促進すると考えられる。そのなかで、タブレットや電子黒板の活用法を考える機会ともなった。

生徒の反応を見ると、既存の授業スタイルと異なることへの違和感や苦手意識を持っている生徒も一定数いることが授業アンケートからもわかっている。しかし、自分から調べ、そのことを元に話し合うことで、今までよりも深い学びであり、自分自身から学ぶことができたと感じている生徒もいた。

このことから、LTD学習法は高等学校においても効果的な学習法であると考えている。しかし、課題は多く残っている。この課題を改善しつつ、計画的にLTD学習法を学びの中に取り入れていきたい。

３　成果

・タブレットを授業の中で活用する方法の発見
（タブレットの活用は調べ学習において効果が十分期待できると感じた）
・新学習指導要領の評価への期待
（学びに向かう力、人間性等など数値化できない評価へつなげやすいと感じる）
・生徒の新しい一面に気がつける
（普段目立たない生徒が、実は日常生活と学習内容の関連を非常に上手にできていたなど）
・生徒が主体的に学ぶことができる
（他の人の意見が新鮮で参考になった、眠くなかった、もっと調べる時間が欲しいなど
自分たちで学んでいるという実感が持てる）
・教科書が一番の参考書だと気づくことができる
（本文の要約等を通して、教科書の大切さを生徒が再確認できる）

４　新たな課題

・時間配分が高校の授業に合わない

（初めての授業で教員からの説明も長かったように感じる。）

・予習の時間を１時間確保することによる授業の時数不足

→行う単元の精選が必要。

・コミュニケーション能力が低い生徒は既存の授業を強く望んでいる

→社会へ出るために必要な力だということを時間をかけて生徒に説明する必要あり

・教員の LTD への知識不足

５　今後の改善策

実践してみて気がつくことは多く、今後も実践と授業アンケートをセットで単元毎に計画的に行っていきたい。その中で、大きな課題が２点ある。１つ目が、50 分を基本とした授業スタイルの確立である。LTD 学習法では各ステップを時間通り行うことが望ましいとされているが、先行研究ではステップ毎に難易度は異なり、大学生であっても難しいとされているステップがある。そのため、より簡易化した流れを一度実践してみて本校生徒の実態に即した学習の流れを検討していきたい。２つ目として、予習のあり方を検討したい。単元の初めに全体の予習時間を用意し、その後は各自必要に応じた予習など、全てを授業時間内で行わず、時数を踏まえた計画的な実践を行っていきたい。最終的には予習を生徒が自らできるようになることが目標ではあるが、大学生を対象とした先行研究等においても、生徒全員が予習を十分行うことは困難であったことがうかがえる。そのため、授業時間内の予習と時間外の予習のバランスを単元毎に考えていきたい。

＊１ LTD とは、Learning Through Discussion　の略称であり、話し合い学習法と呼ばれる学習法である。この学習法はアメリカの大学教育で、学生の学びに対する意欲、希望がないことが問題になり 1960 年代に考案された学習法である。

この学習法は「予習」と「ミーティング」から構成されている。「予習」では一人で学習課題を学び予習ノートを作成する。「ミーティング」では予習ノートを手がかりにグループの仲間と話し合い、課題の理解を深める。「予習」「ミーティング」共に学習過程が決められており、「ミーティング」においては時間配分も決められている。「ミーティング」の学習過程と時間配分は以下に示した通りである。

ステップ		ステップの活動内容	配分時間
St.1	導　入　：	雰囲気づくり	3分
St.2	語いの理解：	ことばの定義と説明	3分
St.3	主張の理解：	著者の全体的な主張の討論	6分
St.4	話題の理解：	話題の選定と討論	12分
St.5	知識の統合：	他の知識との関連づけ	15分
St.6	知識の適用：	自己との関連づけ	12分
St.7	教材の評価：	学習課題の評価	3分
St.8	活動の評価：	学習活動の評価	6分
			（合計60分）

＊予習では「St.1　課題の把握」に変更、「St.9　リハーサル」を追加する。

（A-12　Ⅱ　提出書類より引用）

教職５年目研修（高等学校）を終えて

土木・建築科　　藤田　悠太

1. はじめに

1-1. 研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図ること。

1-2. 研修の内容

（1）講座Ⅰ【実施日：６月１１日（金）】

① 教育相談と人間関係づくり

② 学校組織の一員として～マネジメントの視点～

③ 生徒の実態を踏まえた授業改善①

（2）講座Ⅱ【実施日：９月３日（金）】

④ 生徒の実態を踏まえた授業改善②

⑤ 発達障害のある生徒の理解と支援

秋田県教員育成指標によると、４年目～１０年目は実践的指導力向上期（第２ステージ）「実践と改善」の段階と位置付けられ、各キャリアステージで求められる資質能力は「本県の教育課題への対応」、「マネジメント能力」、「生徒指導力」、「教科等指導力」があり、本研修ではそれぞれの分野について総合的に研修を行った。

本稿では、それぞれの研修内容の概要と、研修の成果と課題について報告する。

2. 講座Ⅰについて（概要と成果・課題）

講座Ⅰの研修は、それぞれ「生徒指導力」「マネジメント能力」、「教科等指導力」に対応する研修であった。

①では、これまで各研修講座で学んだ教育相談に関する内容を再確認することができた。教育相談は日常的に行われる活動であるという視点に立ち、日頃から生徒と良好な人間関係をつくるために、ある問題に関する原因を一つに限定しない円環的思考や、非言語（アイコンタクト・ジェスチャー）も含めた話を聴くということが必要であると改めて感じた。また「無人島 SOS」を用いて、人間関係づくりの演習を行い、今後の学級経営への活用の示唆も得た。

②では、事前に作成した実践レポート[注1)]をもとに、工業科（２名）と商業科（１名）の教員で、互いの教科指導のよいところや改善点などを協議した。教員同士は初任から同じ研修を受けているため、互いの成長を感じながら研究・協議ができ、非常に有意義な時間となった。

3. 講座Ⅱについて（概要と成果・課題）

講座Ⅱの研修は、県内の新型コロナウイルス感染症の感染者の状況に鑑み、オンラインでの実施となり、④については所属校での自己研修となった。Ⅰ期で協議した内容を踏まえて授業改善を行い、その後実際に行った授業について課題が解決されたかを確認する予定であったが、自身で授業を振り返り、さらなる課題を得て、継続的に授業改善に取り組んだ。

⑤では、発達障害のある生徒への理解と関わり方について学んだ。近年、特別支援教育のニーズが高まっており、特別支援教育への理解は、日頃の生徒指導へも転用できる知識が多くあることに気づかされた。

4. おわりに

今年度は新型コロナ感染症の感染状況の悪化に伴い、本研修のほかに参加予定であった研修が中止になってしまったが、今後も「学び続ける姿勢」や「初心」を忘れることなく、常に研鑽と修養に努める教員であり続けたいと思う。

［注］

注１）資料１

注２）資料２

資料１

Ａ－12　教職５年目研修講座（高等学校）Ｉレポート

学校名	大曲工業高等学校	氏名	藤田　悠太	教科	工業（建築）

①　自校の生徒の実態

昨年度校内で実施された授業アンケート（別紙参照）を基に、生徒が授業に臨む姿勢についてみてみると、どの学年もほとんどの生徒が意欲的に授業に参加し、かつ、授業内で積極的に発言できていることがわかる。また、授業の内容を理解しているかまではわからないものの、授業後の理解度を確認できている生徒も大多数である。しかしながら、家庭での学習習慣は身に付いておらず、特に２学年に関しては、約７割の生徒が毎日家庭学習を行っていないことがわかる。

実際に生徒の様子をみていても、圧倒的に学習時間が足りないように感じられるが、積極性や主体性は感じられるため、その能力を伸長させながら学習時間を確保させる指導が必要である。

②　課題別テーマ　ア

昨年度は、就職試験での面接指導や大学入学試験でのプレゼンテーションの対策として、ＳＨＲや授業などあらゆる場面で、「発表・発言する」活動に重点的に取り組んできた。演習形式の授業では、すべての問題を生徒に解答・解説をさせ、それに対して教員が訂正・補足をする授業展開を試みた。その結果、感覚的ではあるが、他の学年の同じ科目の授業と比べて、理解度が高まった。

今年度は昨年度の「発表・発言する」活動に加え、「考えを深める」活動と「書く・まとめる」活動を、新たに授業に取り入れたいと考えている。

「発表・発言する」活動は、ほとんどの時間で実施する。「考えを深める」活動は、単元の中盤から終盤に設定し、タブレットや電子黒板などのＩＣＴを活用して行う。「書く・まとめる」活動は、単元や学期の最後に設定し、レポートやプレゼンテーションを作成する活動を行う。いずれの活動においても、その活動により、さらなる学びのきっかけになるように適切な回数や時間を設定していきたい。またＩＣＴを適宜活用していきたいと考えているが、生徒たちはタブレットやアプリケーションソフトの操作に関する基礎的な技術が身に付いておらず、限られた授業時間・時数の中で、実施して行けるかが課題となると考えられる。

資料２

令和３年度　Ａ－１２　教職５年目研修講座（高等学校）Ⅱ　研修報告書

学校名	大曲工業高等学校	氏　名	藤田　悠太

Ⅰ期に設定したテーマに沿い、課題の解決に向けての授業改善を実践していただきました。そのことを振り返り、自己評価してください。その上で、成果が見られた点と、新たに浮かび上がった課題、今後の解説策について、まとめてください。

＜Ⅰ期テーマ＞

ア．言語活動を効果的に位置付けた授業展開についての工夫と実践上の課題

＜課題＞

各単元（題材）の要点を把握し、ICTを効果的に使用することができるようになる。

＜成果が見られた点＞

生徒の立場と教員の立場のそれぞれから成果を挙げる。

①学習に取り組む態度の向上（生徒）

タブレットを使用することにより、教員が説明したり板書したりするだけではなく、生徒が実際に手を動かしてまとめる活動や調べる活動が増え、感覚的ではあるが、生徒の主体性や学習に取り組む態度が向上したように感じた。

②ICT 活用能力の向上（生徒・教員）

４月当初に比べて、様々な活動に ICT を活用できるようになった。生徒側については、調べ活動では勿論のこと、文字入力ソフトを活用してレポートを作成したり、プレゼンテーションソフトを活用してわかりやすく発表したりすることができるようになった。また教員側については、Google Classroom で生徒と情報を共有したり、Google Meet を使用して、自宅待機の生徒と連絡をとったり、授業に参加してもらったりした。

③指導内容の精選（教員）

「ペアで意見を交換する」や「生徒が説明する」、「レポートにまとめる」、「ICT を活用する」などという言語活動を積極的に取り入れるために、指導内容を厳選する必要があり、改めて単元の要点を見直すことができた。

＜新たに浮かび上がった課題＞

①ICT活用能力の差

大半の生徒は、タブレット自体の操作や、それぞれのソフトの操作に対応しているように見えるが、やはり対応し切れていない生徒もいる。ICTを活用したことにより、受けられる教育に格差が出てしまったり、本質的な評価に差が出てしまったりしないように対応を検討していかなければ成らない。

②生徒の活動と教員の指導とのバランスの検討

ICTを活用するなどといった活動は毎回出来るわけではないため、１年間の学習内容と年間時数とを勘案に入れ、生徒の活動と教員の指導との丁度良いバランスを見極めなければいけない。

＜今後の解決策＞

ICT活用の面で解決しなければならない問題点は数多くあるが、まずはICTを導入したことによる効果を定量的に検証する必要がある。「成果が見られた点」で記載した通り、主体的に取り組むようになった生徒が多くなったような感覚があるが、授業アンケートを実施するなど、数値として導入の効果を検証し、授業改善につなげていきたい。また、年間指導計画を作成する際に、ICTの活用についてもあらかじめ計画に盛り込むことを次年度は実行したいと考えている。

Ａ－１７　実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を終えて

柴田　淳司

１　不登校の未然防止と対応

未然防止がなによりも大切ということを実感した。生徒だけでなく、保護者も関わる対応、面談などの大切さを再確認できた。特に、保護者にどう対応するか、という視点を大切にしている先生方が多く、自分も同様に実践していきたいと思う。

２　学校組織の一員として－自己理解に基づく目標設定－

自分の現状を考えることができた。交流をする中で、教員としての自覚や教育公務員としてのあり方など、印象に残るキーワードがでてきた。強みを生かすとともに弱みをどう解消するのかを今後の課題として、考えた目標を達成できるようにしたい。

３　カリキュラム・マネジメント

これからの学校生活においてカリキュラム・マネジメントの重要性を実感した。特に、週１の改善で年間４割の改善ということは、明日からでも実践できそうだと思う。様々なアイデアを考えながら、今世の中がどういうことを求めているのかを考えながら今できることを実践したい。

４　授業評価による継続的な授業改善

他教科の授業を見て、自分では思いもつかいない進め方やＩＣＴの使い方などを知ることができた。また、授業を見る視点も異なっており、気をつけるべき点、改善策など授業改善のためのよい学びになった、特にＩＣＴの活用は急ぐべく課題の１つであり、なかなかどう使っていいかわからないという状況だったが、使用例を見ることができ、こういう使い方があるのかと知ることができた。また、自分の授業の改善策にもなるのだが、生徒の意見をどうやって共有すべきか、その方法やどう組み立てるのかの様子を見ることができた。今後、様々な方法でやってみたいと思う。

学習指導要領も変わり、また新しい授業を考えていかなければならないことになるが、他の先生方とも相談をしながら授業づくりをしていくのがよいのだと、今回の研修で強く感じた。自分の教科だけでなく、他教科の先生にも話ができればと思った。

大曲工業高校　国語科（科目名：国語総合）学習指導案

日　　時：令和３年７月１６日（金）２校時
ク　ラ　ス：１年EB組
使用教科書：新編国語総合（改訂版）大修館書店
指　導　者：柴田　淳司

1　単　元　名　　生きることと食べることの意味
2　単元の目標　　「食べることの意味」を、自分の実生活と結びつけて考えようとしている。
　　文章の内容を叙述に即して的確に読み取り、キーワードについて詳述することができる。
3　単元の計画　　①全体の概要を確認する。
（全３時間）　　②第２段落（14段落）までの内容を理解する。
　　③「動的な平衡状態」について理解し、第３段落（15 ～ 17 段落）の内容を理解する。（本時）
4　本時の計画
(1)本時の目標　　「動的な平衡状態」について、詳述することができる。　（読むこと　イ）
(2)授業展開計画

	学　習　活　動	指導上の留意点	評価の観点・方法
導入 (10分)	・前時までの内容を確認する。 ・本時の目標を確認する。 「動的な平衡状態」とは、どういうことか。	・本時の目標を提示する	
展開 (35分)	・「動的」「平衡状態」に関わる言葉を挙げる。	・探す言葉を明確にさせるために、「動的」「平衡状態」の意味を確認させる。 ・「動的な平衡状態」の意味が一見矛盾していることを確認させ本時の活動に価値をもたせる。 ・それぞれの言葉の意味の違いに気づかせるために、番号を付けながら整理するよう指示する。	
	・直前の学習活動で挙がった言葉をもとに、「動的な平衡状態」とはどういうことかを説明する。	・重要な言葉を絞るために、繰り返し使われている言葉に注目するよう指示する。 ・それぞれの言葉の関係性を整理するために、前時までの内容をもう一度整理させる。	・「動的な平衡状態」について、詳述することができる。 【ノート】
まとめ (5分)	・本時の目標を再度確認する。 ・本時の目標に関わる問題を解く。		・「動的な平衡状態」に関わる問題を解くことができる。 【演習】

（Ｂ研修）学校組織マネジメント研修講座に参加して

大曲工業高等学校　教諭　柴田明美

１　研修の目標

学校組織マネジメントに関する内容や学校運営上の課題解決に向けての方策等について、主体的・対話的に研修を深め、教育実践の中核を担う教員として資質向上を図る。

２　研修内容

期	日　　時	研　修　内　容	指標における主な項目	
Ⅰ	6/29（火） ※ｵﾝﾗｲﾝ	○本県の教育課題とミドルリーダーへの期待（講話） ○学校組織マネジメントとミドルリーダーの果たす役割（講義・演習） ○学校におけるリスク・マネジメント（講義・協議）	3S 3S 3S	教育課題への対応 マネジメント能力 マネジメント能力
Ⅱ	11/18（木）	○社会に開かれた教育課程（講義・協議・演習） ○内外環境の把握による学校の特色づくりと課題解決策（講義・演習） ○学校の課題解決に向けた組織的な取組①（協議・演習）	3S 3S 3S	教育課題への対応 生徒指導力 マネジメント能力 マネジメント能力
	11/19（金）	○学校の課題解決に向けた組織的な取組②（協議・演習） ○学校の課題解決に向けた組織的な取組③（協議・演習）	3S 4S	マネジメント能力 求められる素養

※3S、4S は秋田県教職キャリア指標による

３　研修内容（研修資料）から

【本県の教育課題】

①学習指導要領改訂の背景

□**新たな社会“Society5.0”の到来**

・2030 年頃には第４次産業革命ともいわれる Iot やビックデータ、人工知能(AI)、ロボット等をはじめとする技術革新が一層進展

・狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、我が国が目指すべき新たな未来社会（超スマート社会）の姿

□**日本の社会構造の変化と課題**

・人口減・高齢化への対応

・テクノロジーへの対応

・グローバル競争への対応

⇒自ら考え、積極的に国家や社会の形成に参画する環境の整備

□**様々な大きな制度改正**

・人間の多様性の尊重等を強化

・障害のある者と障害のない者とが共に学ぶ仕組みとしての「インクルーシブ教育」システムの推進

□**「生きる力」の育成**

・生きる力とは、知・徳・体のバランスのとれた力のこと

□**改訂の特徴を表すキーワード**

・主体的・対話的で深い学び

・社会に開かれた教育課程

・カリキュラム・マネジメント

②本県教育の課題、方向性

□本県教育において、全教育活動を通して取り組む、最重点の課題

・地域に根ざしたキャリア教育の充実

・“「問い」を発する子ども”の育成

1)様々な教育活動における意図的な手立ての工夫

2)「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくりの充実

3)「問い」を発するための基盤となる言語活動の充実

□全国を上回るペースで人口減少、少子高齢化が進行

・本県中学校卒業者数の減少と予測

(H 元)18,112 →(H30)8,169

→(R9)6,658→(R14)5,604

・本県小・中学校　統廃合の状況

H23～R2 年の 10 年間で小学校 66 校減、

中学校 20 校減　合計 86 校　減

・高校 11 年間で 17 高校→6 高校に統廃合

・過去 35 年間の進路状況の推移

③大量退職、大量採用の課題

□本県の教員の年齢構成－H30.　5 月－

平均年齢（小学校）50.4 歳

（中学校）48.8 歳

（特別支援）44.9 歳

（高等学校）46.0 歳

50 代(39.8%)

40 代(44.6%)

30 代(13.0%)

20 代(2.6%)

□大量退職に伴う教育課題

・「秋田の教育の『知の財産』の伝承

年代、教科の壁を越えた共同研究の推進

・管理職の養成

・新人教育の育成

→小学校（最終倍率）1.4 倍

(R2:1.8 倍、R1:2.7 倍)

中学校（最終倍率）2.8 倍

(R2:3.4 倍、R1:6.1 倍)

高等学校（最終倍率）13.1 倍

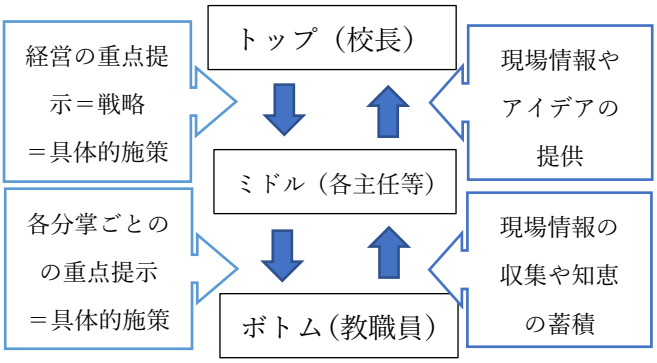
ほぼ若干名、工業は４名程度の募集

全体で 210 名の志願→合格者 19 名

【ミドルリーダーへの期待】

①ミドルリーダーの役割

□学校経営の理解と各分掌の経営（企画・運営）



□ミドルリーダーの役割

・教員集団の改善意欲を内側からもり立てていく「協働の核」

・「ミドル・アップダウン」マネジメント

→タテとヨコのつながりの活性化

→意思形成を図る力

②ミドルリーダーに期待する取組

・それぞれの立場から、教育目標の実現を目指し、校務分掌との関連を明確にし、具体的な施策を提案すること

・教科横断的視点、体験活動、ふるさと教育との関連を図り、カリキュラムマネジメントを構想し、実践すること

・授業力の向上を図り、授業を通して、後輩教員や同僚教員に範を示したり、課題提示をしたりすること

□若手層教員の育成

・小・中では知的財産の継承が急がれる

・貴重な人材を是非「チーム学校」の戦力へ

・良さを引き出し、自信をもたせる（謙虚さも）

・若手層教員に寄り添い、支え、育てること

□魅力的な先生になり、仕事を楽しむこと

・子どもたちに教員という仕事の魅力を伝えたい

□ミドルリーダーの力で学校を変える
・個人力を磨く
・組織力・チーム力を高める
・個業型組織から協働型組織へ

そのためには、
1)到達目標　2)プロセス（道筋）
3)チーム・ネットワーク（コミュニケーション）

【学校組織マネジメント】

□学校における組織マネジメントとは
・学校の有している能力・資源を開発・活用し、学校に関与する人たちのニーズに適応させながら、学校教育目標を達成していく過程

□平成 27 年 12 月 21 日の中教審議会３答申
・地域からの学校改革・地域創生
（→地域と学校の連携・協働）
・学校の組織運営改革（→チーム学校）
・教員改革（→資質向上）

□令和３年１月 26 日の中教審議会答申
・「令和の日本型学校教育」の姿
全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現
・実現に向けて改革に向けた６つの方向性
1)学校教育の質と多様性、包摂生を高め、教育の機会均等を実現する
2)連携・分担による学校マネジメントを実現する
3)これまでの実践と ICT との最適な組み合わせを実現する
4)履修主義・修得主義等を適切に組み合わせる
5)感染症や災害の発生等を乗り越えて学びを保障する
6)社会構造の変化の中で、持続的で魅力のある学校教育を実現する

□学校組織の特性
多元性（それぞれの教職員の立場）
他方向性（それぞれの教職員の教育観）
☆どちらかというとこれまでは、個業型組織
多元性→孤立化・多忙感
他方向性→まとまらない（組織・議論）
・相互不干渉・共有の制約
・単年度主義の恒常化
・不安・葛藤の深刻化

☆協働型組織への転換（プラスに働くと）
多元性→分業
他方向性→知識創造
・意思決定が迅速
・多様なニーズに対応
・個の持ち味・自己有用感

□個業から協働へ
・「組織としての学校」の力の向上
・組織の目的は、そこに所属する人たちの弱みを意味のないものにする一方で、強みを最大限に発揮して成果を上げることになる
（ピーター・Ｆ・ドラッカー）

□学校組織マネジメント（目的・対象・方法・資源）
・目的…児童生徒の成長・発達のため、学校内外の関与者の期待とつながった学校教育目標の達成
・対象…教育課程、生徒指導から人材育成に至るまで学校運営に影響を与える要素・要因のすべて
・方法…Plan（計画）－Do（実施）－Check（評価）－Action（更新）のサイクル
・資源…「人的資源」「物的資源」「資金的資源」「情報的資源」「ネットワーク資源」

※令和元年度学校組織マネジメント指導者養成研修資料
（兵庫教育大学大学院：浅野良一教授）より

☆学校組織マネジメントは、校長・教頭などの管理職だけが取り組むものではなく、全教職員で取り組んでいくべきものである。
☆校長を中心に学校組織のマネジメント力の強化を図るとともに、学校内、あるいは学校外との関係で、「連携と分担」による学校マネジメントを実現することが重要である。

【ミドルリーダーの役割】

□ミドルリーダーは使命感と責任感のある学校のkey person

☆視点１…変わる

教職員一人一人が「変わる」ことの必要性を理解し、難しさを克服して、学校を「変える」主体としての役割を果たすことが必要

☆視点２…見つける

「強み」や「弱み」の中から有効な資源や手立て、解決すべき課題を「見つける」ことが重要

☆視点３…つなぐ

個の頑張りに頼るのではなく、組織として持てる力を最大限発揮していくために、「教職員と教職員を」「教職員と保護者を」「教職員と地域を」「保護者と地域を」つなぐことが重要

※平成２７年度学校組織マネジメント指導者養成研修資料

（国士舘大学：北神正行教授）より

□マネジメントの４つの段階（プロセス）

Planting－「主体化」の種をまく

・他人ごとにしない

・組織の活動において個人が当事者意識をもって主体的に行動する

1)教職員を関与させるタイミング

初期段階での巻き込みが鉄則

2)双方向の情報共有

リーダーが他の職員の話を傾聴した上で自らの考えを伝える

Diagnosis－現状を分析する

・自分の思い込みで判断しない

・学校で起こっている事象を洗い出し、実態を的確に把握する

1)事実に基づく

具体的な事象の可視化による共有

2)多面的な考察

自由な発想・様々な着眼点から

3)「組織」として把握

個人のものであってはならない

※分析：情報の中で残すべき本質的なものと、切り捨てるべき余分なものを区分すること

Clarify－課題を明らかにする

・もぐらたたきにしない

・現状分析に基づき着手すべき課題を特定する

1)事象を論理的、網羅的に掘り下げ主因を探る

何故そうなるのかの問い掛けを繰り返す

2)優先順位を検討し、できるところから着手する

※すべての課題をすぐに解決できる魔法の杖はない。

組織の役割は連続的な取組による改善が必要。

Approach－解決案を立案し着手する

・画餅にしない

・解決策を決定し、実行に移す

1)アウトカム（効果）を問う

それでどうなる？

2)戦略的な決断を行う

影響度と実効性を勘案

3)役割と責任の明確化、評価

関係者の整理

※解決策は策定時点での「仮説」である。将来、予測できない問題に柔軟に対応していくことが重要。

□ミドルリーダーの役割（自己チェック）

○自己実現をしている

○組織として考えている

○得意分野をもっている

○同僚性を大切にしている

○家庭・地域と連携している

○オールラウンドプレーヤーである

４　おわりに

紹介した内容は、本研修の一部である。ミドルリーダーとしての責務を改めて感じるとともに、「チーム学校」として協働型組織を構築することの大切さを学んだ。教員間のコミュニケーションや保護者や地域とのつながりを良好なものとし、協働意欲を醸成する役割の一役を担えるよう努力したい。

令和２年度　大曲仙北学校保健会高校部会研究会　発表資料

発表日　　令和２年１１月１４日
担当校　　秋田県立大曲工業高等学校
発表者　　養護教諭　上田一子

テーマ：「歯と口腔の健康を考える」
～運動部員への指導を通して～

１　はじめに

今年度、この地区の研究当番校になり前年度の秋田修英高校さんの「歯と口腔の健康」の継続研究をすることになった。本校では従来運動部員のケガの予防に力を入れて指導してきたので、それに「スポーツと歯の関係性」を合わせて「運動部員を対象とした歯と口腔の健康」にポイントをおいた指導を実施したので報告したい。

２　文部科学省～学校歯科保健参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での歯・口の健康づくり～より

学校における歯科保健においては「う歯の予防」を中心に取組が行われ大きな成果を上げてきた。しかし、近年の子どもの現状を踏まえると咀嚼などの口腔機能の未発達や口腔の疾病の増加、食育の重要性などが指摘されている。

〈 歯・口の健康づくりの課題と方向性～高等学校～ 〉

１）生涯に渡る健康づくりにおける歯・口の健康の重要性の理解
２）歯・口の健康づくりに必要な生活習慣
（咀嚼、規則正しい食事と歯・口の清掃など）
３）歯周病の予防の意義と方法の理解と実践
４）自分の歯・口の健康課題への対応
５）運動やスポーツでの歯・口の外傷の予防の意義や方法の理解と実践

（高校生の歯・口腔の状態）

・永久歯の萌出も終了し安定しているが、第三大臼歯の萌出に際して炎症を起こす「智歯周囲炎」という疾病もある。
・歯列不正や不正咬合あるいは顎関節症や口臭に関して興味関心を持つ生徒が多くなるので、こうした疾病の背景因子について科学的な説明が必要となる。
・成人期の入り口に達するので生涯にわたる健康づくりの視点が必要になる。
生活習慣病にかからない生活への自覚をもってもらう。
・コンタクト・スポーツや野球などで「歯・口の障害」の件数が圧倒的に多くなるので安全学習・安全指導を深める。

３　本校の実態（歯科検診結果より）

・歯科検診の結果を見ると健全歯の生徒が多いのがわかる。（以前と比較し増加傾向）
　また、未処置歯（齲歯の治療が完了していない）のある生徒でもほとんどが１本である。その１本の治療にすぐに行く生徒となかなか行かない生徒に分かれる。地区、全国と比較と比較してみると「未処置歯保有率」は低く、良い状態である。それに対して「処置完了率」も地区、全国と比較し低くなっており今後の指導が必要なことが判る。

・夏休み以降に歯の治療が完了した生徒は２１人である。（治療完了の用紙を提出した生徒の数）

・９月調査の昼食後の歯みがきは女子生徒全員、男子では野球部と関心のある生徒という結果である。

・平成２６年以降運動部員で「歯のケガ」（骨折）をした生徒はバスケットボール部の生徒が１人だけである。「顔面打撲」や「鼻骨骨折」のケースは数件見られたが「歯」のケガは他にはなかった。

・「口腔の状態」は顎関節、歯列・咬合、歯肉、歯垢の４項目で各項目の判定が「２」の生徒を見ると、どの項目も地区、全国と比較し悪い状態であることがわかった。

４　調査結果①

地区の実態（全国平均との比較）

・「齲歯の処置完了率」は全国と比較し１．５倍ほど高く「治療に行こう」という意識が高い生徒が多いことがわかる。
　学年が上がるのと比例して処置完了率も高くなっている。（本校は２年生が３年生よりも高い。）

・「未処置歯保有率」は全国平均よりも低い。
　特に１年生は２、３年生よりも低い。高校の入学前に齲歯の治療を終えようと思っている生徒が多いと考えられる。

・口腔の状態では２年生の「歯列・咬合」の判定２の生徒が全国と比較し少ない。

・「歯肉」の状態はどの学年も全国と比較して良い。

・「歯垢」は１年生が全国平均よりも悪いが２、３年生は良い。

＊よって、ここ大曲仙北地区の高校生は、「齲歯の有無」は全国と比較し「無」の生徒が多く「口腔の状態」も４項目全体では全国よりも良い状態であることがわかる。

調査結果②

１、２年生の運動部員への「歯と口腔の健康に関する調査」の結果

１）実施日　　令和２年８月２４日～２６日（３日間）
２）対　象　　１、２年生運動部員　１５６名
３）実施方法　　各クラス担任が配布及び回収
４）集　計　　養護教諭
５）備　考　　アンケート調査用紙

・「今まで歯をケガしたことのある」生徒も一定の数いたが、高校でスポーツ振興センターへ給付金請求をしたケースはない。
・「歯みがき」は全員が毎日している。
・昼食後の歯みがきはしている生徒としていない生徒が半々であった。しかし、クラスで調査をしたところその結果と大きく差が見られた。調査では「している」と答えた生徒でも実際は「していない」ようだ。
・「どういうときに歯が大事だと思ったか」の内容は、「虫歯で痛みがあるとき」以外に「力を入れて何かをやるとき」「食べるとき思った生徒が多かった。
・「歯の健康で気を付けていること」は、「虫歯の予防」、「歯周病予防」の他「よく噛むこと」と回答した生徒が多かった。

５　調査実施後の指導内容

①学校歯科医　船木康博先生による講話

テーマ：「スポーツと歯の健康について」
対　象：１、２年生の運動部員（１２０名）
日　時：１１月２日（月）午後４時～４時３０分
場　所：第１体育館

②ほけんだよりによる啓蒙活動

１、２年生の運動部員へほけんだより

・「スポーツと健康な歯がどのように関係するのか」を部活動顧問よりほけんだよりを使い指導してもらった。
　また、う歯のある生徒には早めに治療をするように伝え、今まで以上に歯を大切にしていく必要性について指導した。

③バスケットボール部員への啓蒙活動

・昨年度から実施しているバスケットボール部員の体重管理を通して「食事内容（練習前、練習後、試合前、試合後）」、「補食の必要性と内容」、「噛むことの大切さ」を保護者にも知ってもらった。

6　成果と課題

＊運動部は「力を入れるために歯を噛んで踏ん張る」場面を経験しているため、「歯は大事」と思ってはいても「歯みがき」以外のことはなかなかわからないようだ。そこで今回の指導を通して「その技術だけではなく、歯が健康でなくてはならないこと」を少しは理解できたようだ。

・う歯を１０本以上保有する（いわゆる「口腔崩壊」）の生徒の調査と対応を実施する必要性を感じた。
・「歯肉」の状態が判定２以上の生徒が１～２％見られる。「歯垢」は４～７％なので歯垢の状態を良くすると歯肉の％もよくなるのではないかと推測されるため「歯みがき」の指導を今以上に薦めていきたい。
・生徒たちには「歯の指導」から体全体の健康つくりを考えさせたい。
・高校では家庭、地域を巻き込んだ指導は難しいが「健康な歯」の指導においては「食事」と繋げていくことで家庭と一緒に考えていくことができると思う。

7　考察

大曲仙北地区の高校生の歯の状態は全国と比較すると高い水準であることがわかった。

我が秋田県は高齢化率が全国１位ということで県民の意識の醸成と環境の整備に力を入れている。そのような中で「健康寿命」の引き上げが急務であり、私たち教育現場でも子どもたちの健康な歯や口は生涯にわたる健康つくりの基礎であり生活習慣病を予防するための大事な指導項目と認識し指導に当たっている。
また、人生８０年時代から１００年時代へ進みつつある今、高校での指導がいかに生涯の健康つくりに関係してくるかを実感している。

ともすれば「歯」のみの指導に留まってしまいがちなところであるが、歯周病に見られるように口腔の状態や全身の状態も「歯の健康」に大きく関係してくるため総合的に指導していく必要がある。

１００年以上前の「スペインかぜ（インフルエンザ）」の感染予防ポスターに「うがい・手洗い・マスクの着用」が謳われていたほど今も昔も衛生管理の原則は変わらない。その科学的・医学的根拠を子どもたちに伝え、それがまた次の世代に繋がっていくことをこの新型コロナ感染症の大流行の時代に生き抜く私たちの役目と思いを深くしている。

（参考資料）

１．文部科学省一学校歯科保健参考資料
２．平成２９年度秋田県歯科保健対策報告書

令和３年度新任特別支援教育コーディネーター研修会（第Ⅰ期・第Ⅱ期）に参加して

教諭　佐藤美奈子

	（第Ⅰ期）	：	（第Ⅱ期）
１　期　日	令和３年６月２４日（木）	：	令和３年１０月１８日（月）～１１月１２日（金）
２　場　所	横手市浅舞公民館	：	オンデマンド配信による研修
３　参加者	保育教諭、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教諭、養護教諭等		

４　目　的

各学校（園）における特別支援教育の推進に向け、特別支援教育コーディネーターの役割を担う上で必要な知識や技能、態度等を育成する。

５　（第Ⅰ期）内容

〈開会行事〉　特別支援教育課主任指導主事　清水潤氏

〈説明〉　「新任特別支援コーディネーター研修会の進め方」　特別支援教育課指導主事　小野武則氏

〈講義〉　「校内支援体制ガイドラインに基づく校（園）内支援体制の整備・充実」

特別支援教育課主任指導主事　清水潤氏

〈講義・演習〉　「特別な支援が必要な幼児児童生徒の理解と実態把握」

県立支援学校天王みどり学園教諭（兼）教育専門監　新目敏子氏

〈講義・演習〉　「個別の支援計画と個別の指導計画の作成」

県立横手支援学校教諭（兼）教育専門監　菅原咲希子氏

〈閉会行事〉　特別支援教育課主任指導主事　清水潤氏

６　（第Ⅰ期）感想

この研修では、個別の支援計画を支援の対象となる生徒の良さを引き出すことに留意して作成すること、面談以外でも日常的によく行動観察をし、生徒本人の話に耳を傾けて課題を整理しながら適切な目標を設定して自己肯定感を高めていく重要性を学んだ。

また、校外の専門機関との連携や、学校全体での情報共有化の重要性について認識することができた。生徒に対して、途切れのないライフステージにおける支援がなされることに努めていきたい。

７　（第Ⅱ期）内容

〈挨拶〉　特別支援教育課副主幹（兼）班長　阿部純一氏

〈講話〉　「保護者の立場から特別支援について思うこと～１１月１２日『心に寄り添う支援を』～」

秋田発達障害児・者親の会アインシュタイン会長　小田嶋榮氏

〈講義〉　「対象幼児児童生徒への指導・支援の評価」

県立能代支援学校教諭（兼）教育専門監　藤田久美子氏

〈講義・演習〉　「個別の支援計画と個別の指導計画の作成」

県立横手支援学校教諭（兼）教育専門監　菅原咲希子氏

〈説明〉　「障害のある子どもの教育支援の手引き～子どもたち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」

特別支援教育課主任指導主事　清水潤氏

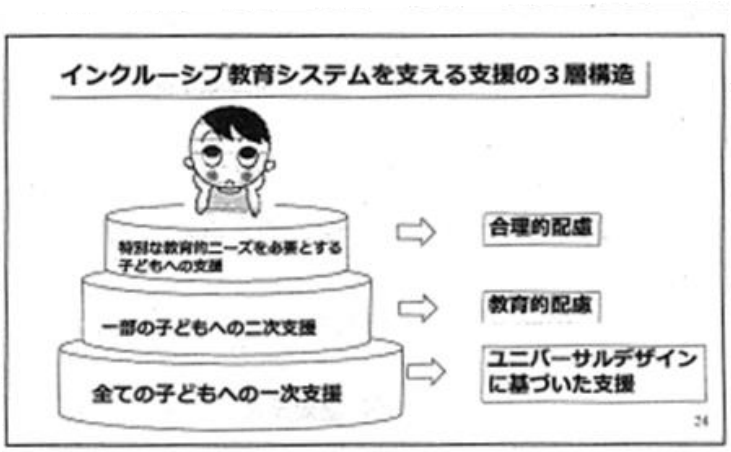
〈挨拶〉　特別支援教育課課長　佐々木孝紀氏

８　（第Ⅱ期）感想

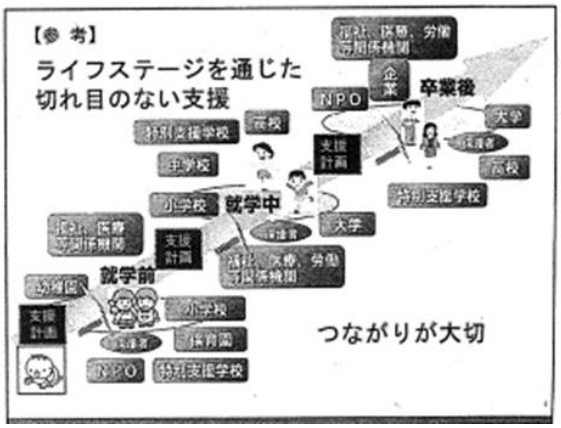
保護者の方からの講話もあり、支援が必要な生徒や保護者の方々が悩んでいること、困っていることについて具体的に教えていただいた。生徒、保護者の「心に寄り添う」支援や指導を行っていくことを心がけたい。支援計画の評価については組織的に行うことを意識するほか、生徒本人が自らの活動を振り返る機会ともなるようにしていきたい。それによって、生徒自らが環境に働きかけていく力を育てることにつなげていくようにしたい。

また、本校では養護教諭中心とし、定期的に校内支援委員会を開くことができている。今後も職員全体での情報共有がなされるよう、努めていきた。

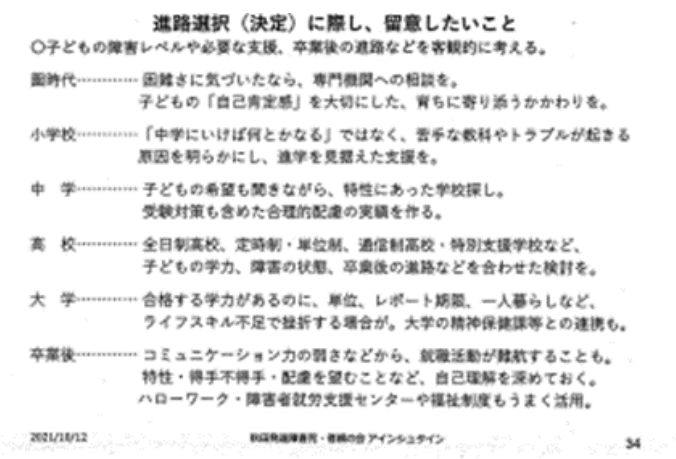
資料１



資料２



資料３



資料４

授業互観週間

１　目的：　お互いの授業を気軽に参観して、授業者がアドバイスをしてもらったり、参観者が以後の自分の教科指導の参考にする。これを教員個々のリフレクション（振り返り）の契機とし、授業力の向上を図る。

２　重点：次の「令和３年度学校教育の指針」にある全教育活動を通して取り組む最重点の教育課題の中から、今回の授業互観のテーマとして次の★印の付いた（２）、（３）を取り上げる。

（１）地域に根ざしたキャリア教育の充実　★（２）“問いを発する子ども”の育成

★（３）ＩＣＴを活用した教育の推進　（４）グローバル社会で活躍できる人材の育成

（５）道徳教育　（６）人権教育　（７）生徒指導　（８）特別支援教育

（９）防災教育

３　期間：１１月１５日（月）～１９日（金）　５日間

４　対象：全教職員　　※1人２時間の参観に努める。

５　実施の手順

互観前	(1)授業者は、互観授業の入力シートに入力する。 ※google meet や zoom を使ったオンラインの授業互観に取り組んでも構わない。 (2)参観者は、入力シートを参考に参観の希望を授業者に口頭で伝える。 (3)授業者は、必要であれば参観者に資料を配布する。 (4)担任は、SHR 等で授業参観週間があることを事前に伝える。	11 月 9 日（火）まで 参観日の前日まで 参観日の前日まで 11 月 12 日（金）まで
授業時	(1)参観者は、授業時間内で都合の付く時間の範囲で参観する。 (2)感想やアドバイスを記録する。録画や録音については授業者に了解を得ること。	
互換後	(1)参加者は、参観後の感想やアドバイスを入力シートに入力する。 (2)授業者は、入力シートに目を通し授業の振り返りを行う。	参観後３日以内

6　実施した授業

担当者	単元	ねらい	重点	課題	改善への取り組み内容
佐々木　学	遺伝子とタンパク質の合成	生物のからだの状態を保つはたらきについて、そのしくみを理解できる。	ICT	提示	解説のスライド中に動画を取り入れ学習の手助けとする。
佐々木　学	物質量	物質量と質量や体積との関係を計算できる。	ICT	ワークシート	計算の練習ができるワークシートを与え習熟度を高める。
佐藤　美奈子	小説『こころ』	作品の主題に迫る	問い	ワークシート	生徒が意見交換することで、考察が深まるようにする。
高橋　雅生	Kimonos are cool	日本文化についての対話文理解することができる。	ICT	提示	ペアワークを適宜取り入れ、バランスの良い4技能の育成を目指す。
高橋　雅生	Architect in Action	有名な日本人建築家の若者へのメッセージを読む。	ICT	提示	ICTを適宜活用し、内容理解や表現する活動に役立てる。
高橋　直樹	西洋音楽の歴史	ロマン派の音楽に親しむ	ICT	ワークシート	視聴覚機器を効果的使用し耳と目で音楽を味わう
山元　裕	三角関数	受験対策	問い	提示	難問に挑戦する前向きな姿勢を引き出す発問
佐藤　広将	感染症の予防	予防の原則と現代の対策	問い	発問	普段の生活で実践している対策を考えることで、より理解が深まるようにする。
柴田　明美	第一次世界大戦	これまでの戦争との違いを理解できる	ICT	ワークシート	解説のスライド中に動画を取り入れ、考察や理解を深める。
柴田　淳司	俳句	根拠をもって作品を評価できる。	ICT	主体的	ICTを活用し、相互の感想を交流しあう。
有坂　俊吉	プログラミング	受検対策	問い	提示	模擬試験をとおして、自分の理解度を検証する。
工藤　稔	力学的エネルギー保存の法則	力学的エネルギー保存の法則をもとに立式し計算することができる。	ICT	体験的	ICTを活用し、エネルギー保存についてイメージを持つ
藤井　十二支継	いろいろな施工技術	砂防えん堤の施工方法を理解する	ICT	提示	ICTを活用し、施工方法についてイメージを持つ
菅沼　善彦	南アジア	インド「亜大陸」の意味に気付く	問い	発問	インド特有の自然環境と文化に興味を持つ。
佐々木　和美	自動車用エンジン	膨張行程	問い	発問	点火と膨張行程について思考を深める
髙橋　佳照	感染症の予防	予防の原則と現代の対策	問い	発問	自身が実践している予防対策を意見交換することで、考察が深まるようにする。
鈴木　巧	シーケンス制御	シーケンス図の読み方、PLCからラダー図、プログラムを作成する	ICT	提示	ICTを活用し、シーケンスの読み方とPLCを確かめる。
高階　亮太	エネルギー	力学的エネルギーの関係式を導き、計算することができる。	問い	発問	日常生活で体験しているエネルギーを生徒間で共有させながら理解を深め立式させる。
正中　俊之	複素数と方程式	複素数の範囲で因数分解ができる	問い	発問	ワークシートを与え、理解を深めさせる
鎌田　正樹	Cによるプログラミング	C言語プログラミングの基本形式を理解する	ICT	提示	ICTを活用し、プログラムの基本形式の理解度を高める。
岩田　佳紀	プラスチック	プラスチックの分類及びリサイクルの意義について理解する	問い	主体的	実験から材料に関する関心を高める
羽角　陽一	大気汚染と健康	大気汚染の問題について理解することができる	問い	主体的	前週までの視聴覚教材の内容から、さらに自分の生活に活かせる理解へと深める。
髙橋　健一	The Story of Chocolate	チョコレートの製造過程について英文をとおして理解することができる	ICT	提示	ICTを活用し、英文読解だけでなく、視覚的にも分かりやすく導入、説明する。
武藤　昌	シーケンスⅡ	ラダー図から、プログラムを作成でき、正確にタブレットから打ち込み、動作	問い	体験的	シーケンスを入力したことにより、動作を体験出来る。
高橋　純一	誘導電動機	原理・始動方法の確認と実技	問い	体験的	実験から電動機に関する関心を高める
阿部　亮介	図形と計量	三角比を利用した測量ができる	問い	主体的	三角比の値を測量に利用しようとしている
阿部　亮介	図形と計量	三角比を利用した測量ができる	問い	主体的	三角比の値を測量に利用しようとしている
浅原　信	ベクトル図	瞬時値の式からベクトル図を描く	問い	提示	ベクトルを用いて正弦波の合成について考える。

7　参加しての感想

学習事項に合わせた ICT 教材の活用が大変参考になった。また、生徒の発表の機会が多く、生徒の主体性が大切にされた授業であった。
発問の丁寧さによって理解しやすい工夫がなされていた。ICT 機器の活用もスムーズになされていた。

考えが似ている生徒同士でディスカッションさせているところに工夫を感じた。また、本の帯を考えさせるのがとても面白かった。とても参考になりました。ありがとうございました。
クロームブックでの解答による、クイズ形式の導入に工夫がなされていた。ペアでの解答も、相互に話し合い考察を深める機会となると感じた。
生徒がとてもはつらつとしていることに驚きました。日頃の指導（音楽に親しむ）の成果が表れていました。ワークシート配布時の生徒の反応から、思考の活性化が十分に期待できると思いました。自分の授業の改善にとても参考になり有難うございました。
生徒の理解度を確かめながら、落ち着いた授業展開だった。
クロームブックを活用し、生徒個々のの感想が、すぐに全体で共有できていたことが大変参考になった。
ICT を活用した授業内容が参考になった。
ワークシートを使い、真剣に取り組ませていた。要所での効果的な発問により題材への興味付けがなされていた。
自分の言葉で理解させる技術に長けていた。
単元の基礎となる部分を生徒が調べ、発表を行うことで主体的で内容が定着できる学習につながっていた。
浮力の違いで材料の違いを実験と通して説明したことは視覚的にもわかりやすく、材料に関心を持つきっかけとなっていた。
生徒が授業に参加しやすい進め方が 参考になった。
シーケンスについて生徒は手順を踏んで知識と技術を身につけていた。参観していてとても楽しかったです。
生徒は得た知識を実際に発動機を使って理解をさらに深めていました。初めて見る授業でとても楽しく、新鮮でした。

編集後記

昨年度に引き続きコロナウィルス感染症の影響により、学校現場では様々な模索と工夫が求められた１年でした。 2019 年 12 月に文部科学省から発表されたプロジェクトである GIGA スクール構想により、電子黒板が設置や、全生徒に一人一台のタブレット端末の貸与など、設備面での整備は着々と進んでいます。 学びの場でも、生徒の興味関心を高め、思考や理解を深めるたりするために ICT を活用することも増えました。

研究集録４７号の発行にあたり、多忙な中にもかかわらず、多くの先生方に寄稿していただき、心より厚くお礼申し上げます。また、多くの先生方の協力のお陰で、校内の研究授業や授業互観などにおいて、大きな研修成果を上げることができました。今後も日々の教育活動が充実したものになるよう研修の充実を図っていきたいと考えています。

最後に、本集録が本校教育の充実のために少しでもお役に立てれば幸いです。

令和４年３月　秋田県立大曲工業高等学校研修部